

回らなかつたからであつた。

舟山島の二隻の乗員は爆発の寸前、海に飛び込んだらしい。新聞記者だけが泳げなかつたので皆が一緒につれて陸の方へ泳いでいたが、陸上から銃撃を受け沖の方へ反転した後はぐれてしまつた。そ七号艇で調査の結果、記者のほか兵二人が不明であつた。泳いでいた時元氣に見えた人々も救助された瞬間ぐつたりと死人のようになる。全身を使い果たして死線の境をさまよう姿を眼前に見た。応急の警備編成をして三日後、その付近を通つたとき、新聞記者の水死体を発見した。カメラ、時計を遺品とし水葬の礼をした。

翌朝掃海を再開。引潮の流れの中にあつた、あつた。探し求めていた機雷が「一ツ二ツ三ツ四ツ五ツ六ツ」とあるわ、あるわ。平井兵曹長は夕べあの上を走り回つたんだと事もなげに笑つたが、誰言うともなく「ヒャー」と悲鳴にも似たような声が出た。

機雷を爆破するため「ジャンク」を雇つて辻兵曹、渡辺上水の二人が同乗。一〇〇呎くらい離れてスイッチを入れると、水しぶきが五〇呎くらい上がつて機雷は次々

と消えていった。初めは恐れていたジャンクの人たちも帰りに塩一袋、フカの塩漬一樽をもらい「謝々」といつて帰つていった。

洗面器一杯の水で洗面から禰まで洗い、スコールをみては裸になつてタオルと石鹸を手に甲板で汗を流した。罐詰ばかりの副食に足がむくれ「カッケ」の出る生活だったが、九月二十五日やつと上海の江南に帰投した。隊内にはすでに先の重傷者、護送中の四氏の遺影が飾られ、出迎えた戦友もわれわれの無事帰還を喜んでくれた。

今は精魂つき果てて死んでいった戦友の姿を思い浮かべながら、平和の有難さを喜ぶとともに犠牲となられた人々の事を忘れてはならないと思つ。

西路作戦

島根県 井上光雄

我々の第五師団（広島）は昭和十四年の暮れに広西省南寧を攻撃し、敵の残された重慶に対する補給路を遮断

したのである。

これに対してこのルートを奪回しようと重慶軍五万が南下し、これを旅団は南寧北方崑崙關に支え、中村旅団長戦死等筆舌に尽くせぬ苦闘の末、支援の各兵団の到着を得て、敵を北方に撃退し得たのである。

私たちはこの激闘の報に接し、教育半ばにして至急補充として南の果ての地、広西へ赴き、南寧の郊外で三木大佐の率いる残存連隊に追及したのである。

私たちの隣の第五中隊は全滅中隊で、中隊長、田村中尉の名を冠し崑崙關に田村山と名を残すのみであった。

西路作戦はこうした状況下、奇巖屹立嶺々として、この世の風景と思われぬ辺境の地、広西省の中で、強敵広西学生軍の激滅を期した作戦であった。

特筆すべきは、この作戦が全行程一五〇里(六〇〇^キ)を一五日間で踏破し、その間、渡河等に数日をつぶしたため、一日二〇時間行軍の日も何日も行われるという強行軍の繰り返しであったことだ。

雨中の行軍

行軍の第一日は朝から雨だった。機関銃隊は一般中隊

と異なり、背嚢でなく、携帯用天幕に飯盒、食糧等を包んだ背負袋である。背負袋はそのまま機関銃を銃身部と脚部に分解して、担ぐことができるためである。

背負袋の中には

飯 盒 二食分の炊いた飯

米 新しい靴下に入れて七日分

副食物 粉味噌

携帯口糧 乾麵包

その他 下着、煙草

それに小隊長、分隊長の分も分けて担ぐ。初年兵の背負袋の重量は一人三〇^キを超えるのである。

南支の三月は日中三〇度を越し、内地の盛夏並みである。行軍開始とともに、軍衣は上から下まで水の中から上がってきたようにぐっしり濡れている。

朝からの雨だが、動作が不自由なため、雨具の外被を着用するものは一人もない。濡れたままの行軍である。

道路は南寧―明江―仏印国境へと通ずる自動車道に沿っての行軍であるが、その道路が一〇〇^キぐらいの間隔に、深さ五、六^キも掘り返されて寸断され、自動車は

もちろん、輜重車両の通過も出来ない状態である。

雨で路面がぬかるんで軍靴が土にめり込む。上からは雨。暑さと南支の一〇〇%の湿度、たまったものでない。

午後の四時ごろから落後者が相次いで出てくる。私は仕方なく落後者の銃を受け取った。

こんな風景が夕闇とともにあちこちに刻まれていく中を雨は降り続ける。部隊は黙々と前進を続けていく。

水 飼

今日は出発後何日目だろうか？

部隊は山の稜線の嶺伝いに歩いている。初年兵仲間の岡田が大分参ったようだ。絶えず分隊の一番後方を引きずられるように歩いている。水飼は軍馬に水を与えることである。馬は牛と異なり反芻消化しない動物である。呑み下した餌を再び腔中に返して噛むことが出来ない。

したがって食前、休憩時には必ず水飼をせねばならない厄介な動物である。水飼をおこたった場合、疝痛という厄介な病気を起こす危険があり、何時どこでも水飼は駄馬部隊の至上命令である。

軍隊の行軍は四十五分歩いて十五分休憩が普通である。

その十五分が駄馬部隊の初年兵の水汲みタイムである。

水が路傍にある場合もあるが、今日のように峰から峰へと高地の道を行軍する場合、遙か下の方にある谷川へ水汲みに降りるしかない。こんな場合でも水飼だけではどうしてもせねばならない。分隊に四、五人しかいない初年兵の仕事である。息も絶え絶えに歩いていた彼らの中から誰かが水囊を携えて谷底へ向かって降りて行かねばならぬ。二人がやっと水を汲んで登ってきた時は、十五分の休憩時間は過ぎて部隊も馬も行軍に移っている。折角汲み上げた水を携えて、歩度を早めて分隊に追いつき、歩きながら馬に水飼を終えるとまた直ぐ休憩、休むまもなくまた水囊を手にして谷底へ・・・。

かく一日の苦闘が繰り返されながら、前進また前進。

夜行軍

広西省の仏印に近い辺境は日中は四〇度に近い猛暑であるが、夜間になるとさすがに気温も下がりが冷氣ささえ感ずる涼しさである。昼間は休憩の度この軍馬の水飼も、夜間はほとんど必要がなくなる。

それとともに急に眠気が催してくる。歩きながら眠る

ということは平常は想像もできないことであるが、疲れきった状態の中では歩きながら眠ることができるのである。その場合の絶対の要件は、何かに頼まって歩くことである。それには馬である。馬のどこかに頼まって歩くことである。馬具の一端か、時には尻尾の一本であることもある。前方から行軍が止まる。馬も止まる。が眠りながら歩いている兵は馬の尻にぶつかって、ハッと目を覚ます。暗闇の中で苦笑しながらまた眠っている。

弾薬手六番

行軍の前方で急にパンパンと銃声が起こる。「機関銃前エ!」「銃を降ろせ」銃を馬の背から下ろし「分解搬送」で銃手一番から四番までが銃身部(三〇*)と脚部(三〇*)に分けて担いで走り出す。弾薬手は五番以下八番までである。五番弾薬手は古年兵の喇叭手の「熊さん」である。銃手に遅れじと走り出す。私は弾薬手六番である。弾薬箱には一連三〇発ずつ連結されていて、それが二〇連、計六〇〇発(重さ三〇*)の銃弾が入っている。五番の「熊さん」の後を遅れじと続いて走る。途中、南支の部落の迷路で先を走っている「熊さん」を見失う。

が懸命に走って部落を出たところで、分隊長以下機関銃を組み立て終わって、五番弾薬手の来るのを待ちに待っているところへ、五番より先に六番の私が息も絶え絶えに弾薬箱を担いで到着。待っていましたと、ドードードーとあの独特な日本重機の力強い発射音を立てて敵線をなぎ立てる。

私の運んだ六〇〇発は、連続発射すれば二分間もない。直ぐ空箱となる。敵が右に右にと移動しているのが見える。空箱を抱えて伏せている私に、ふと前方に畑一面に白菜が目に入った。南支では白菜等夢にも出会うことが出来ない「夢の食物」である。敵弾の中ではあるが、幸いに浅い溝がある。それを潜って畑に近づき、空になった弾薬箱いっぱい白菜を充たす。

今日の私の弾薬搬送が時を得たことで、小隊長の水筒から支那酒を一杯頂戴し、満足な一刻であった。

大高峰嶺の朝

夕方、部落の敵に対して機関銃を浴びせた。敵は機関銃の中をたくみに地形地物を利用し峠の上の方へ上の方へと逃げてゆく。我々がその後を追って進んでいくと、

敵兵に混じって子供や老婆の死体もかなりある。どんなことがあっても日本国内を戦場にはならないと心に誓って、前進して行く。

やがて日も暮れた。部隊は高い狭い道で、一步前進・また停止・一向捗らない行軍である。夜もかなり更けてきたようだ。しかも小雨さえ降ってきた。「大休止」の通伝である。この狭い道で馬を繋ぐ場所もない山上で、行軍隊形のまま・「大休止」とは無茶だ!。と何度考えてみても命令である。二進も三進も出来なくなった部隊は、峰続きのこの山頂に行軍隊形のまま夜を徹する以外にないようだ。

馬は弾薬箱を降ろして繋いだ。馬に踏まれないように兵は行軍隊形のまま、道に一直縦隊に腰を降ろす。背負袋は背に負うたまま・、やがて路面に雨水が流れ始める。頭から各自は外被をかぶっているが、道を流れる雨水は背から尻に向かって肌を伝って流れ始める。どうすることもできない。眠れないままあれこれと考えているうちに疲労の溜ったこの二週間の身体は、何時となく背筋に雨水の流れを通しながら、熟睡に陥っている。

気が付いた時は夜明けだ。一面の霞か雲か、仙気に満ちた山頂の道に夜明けがおとづれている。下の方は底もしれぬ断崖上の小道の上に部隊は朝を迎えている。

遙かな彼方の地平線に、私たちの出発した懐かしい南寧が望見出来た。私はこの峠を「大高峰嶮」と自分で勝手に名付けた。

あとがき

終戦後四十数年、製材業を営んで、時には逆境にも見舞われた人生航路であった。が苦しいとき、この初年兵時代のこの作戦の苦しみを思い出して、何をこれしきりと頑張り通した。有り難い人生の経験でもあった。